OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	〈新自由主義〉：韓国のある教会に見た悪徳づくりの過程とその影響
Author(s)	太田, 心平
Citation	年報人間科学. 2002, 23-1, p. 95-114
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/12236
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈新自由主義〉：韓国のある教会に見た悪徳づくりの過程とその影響

太田　心平

〈要旨〉

本稿は、ある教会において新自由主義という経済学用語が原義から逸脱していく過程を明らかにすることにより、近年の韓国社会の政治文化が構築されていく様相を論じるものである。

キーワードに関する先行研究は、社会において価値が高いと盲信されていることばだけを取り上げてきた。しかし韓国における新自由主義のようなことばは、社会で絶対的に否定される。このようなキーワードが誕生する過程は、本稿の事例によれば、そのことばに対する否定的イメージの付与と、対称関係にあるキーワードによる対比によって成り立っている。更にそれが人々の具体的な日常的困難を説明するのに使われた時、ことばは悪徳のキーワードとなる。そしてこれらのキーワードは、原義とは異なった対象への評価や感情を表現する際にも用いられることとなる。

キーワードとなったことばが原義とは異なる対象へ使用される時、原義やその修辞的用法の発生過程を知らない者は、ことばを聞いてその内容を曖昧に把握することがある。その場合には、その把握が原義どおりの対象への認識・評価・感情に反映されるという混同が生じる。近年の韓国においては新自由主義ということばがこの混同を多く引き起こしており、その混同が外交や内政の多様なイシューに対する現代韓国の政治文化を構築している。

キーワード

韓国、政治文化、キーワード、組織、民衆的認識

1　序：経済学用語と政治文化

1.1　研究の背景と目的

本稿の目的は、近年の韓国社会の政治文化が構築されていく様相を、参与観察と聞き取り調査に基づき微視的に論じることである。本稿では、〝新自由主義(shinjayujuūi)〟という経済学用語を例に、ことばの指示内容が再生産され利用される過程と、それが民衆(grassroots)の政治文化に与える影響を例示する[1]。

なお本稿は、一つの組織集団を事例としつつ、その様相の一部を韓国社会全体に敷衍して論じようとするものである。紹介する具体例は、ここで言わんとする内容に限っては韓国社会に対する代表性を十分に持っているが、詳細描写はあくまでも事例であり全体像ではない。また、ここで論じるような民衆的認識とそれに基づく政治文化の様相については、韓国以外の社会を事例としても類似した議論を展開することが可能だと考えられる。つまり本稿では、Y教会や韓国の「伝統」や特殊性ではなく、特殊な社会的脈絡において看守できる通時的・通文化的な人間社会の姿に焦点が当てられる。

一つのことばは、隠喩や象徴の効果によって原義から逸脱することで複数の内容を持つことになる。時には、ことばの再生産の過程において発話の客体がことばの意味を「誤解」することにより、ことばが新たな指示内容を持つに至ることもある。このような「誤解」が生じた場合には、ことばは「言語規則(linguistic rule)」によって一般的に期待される「発話行為(speech act)」から離れ、むしろ聴衆が認識した「誤解」の内容に沿って機能する[Tannen 1986]。ことばが持つこれらの複数の内容は、ことばの定義や解説からではなくイメージと用法からその内容を認識する民衆にとっては、明確に区別されることなく使用される。特に「政治的状況に関する認識的・評価的・感情的な政治的傾向」という意味での「政治文化(political culture)」[Almond 1975: 35]には、ことばの逸脱とともに、この民衆的認識の曖昧さが大きく反映されている。

例えば、〈パルケンイ(ppalgaeng'i)〉ということばは、共産主義思想および反共思想が二〇世紀初頭に韓国へ入ってきたと同時に、共産主義者を表すものとして〝パルガン(ppalgang)〟(赤)という名詞から作られた隠語である。しかしこれは、反政府勢力や危険分子を表すことばとして拡大解釈され原義から逸脱し、同時に朝鮮戦争と東西冷戦の後に続いた北朝鮮への敵対心や恐怖感などを背景として民衆の間で微妙に「誤解」されてきた。共産主義者の政治的な特徴とは無関係に、〈パルケンイ〉は国家の公安および個人の安全のために関わってはいけない人々を表すものだとして把握されてきた[2]。この把握が、共産主義者という原義とおりの指示対象である共産主義者への認識・評価・感情へも還元された。本稿で「誤解」というのは、ことばの多義性のために、人々が認識・評価・感情の面で複数の対象を混同することを示す。

民衆運動に対する制限が大きく緩和された九三年「韓国民主化」以降、〈パルケンイ〉をめぐるこのような政治文化の構築は極めて

弱くなった。だが九七年から続く経済不況期においては、〈IMF〉ということばが〈パルケンイ〉の場合とまったく同じ形で政治文化の形成に関与した。原義として国際通貨基金(International Monetary Fund)を示す〈IMF〉は、同機関が介入した韓国の経済不況を表す隠喩になり、その用例として〝IMF克服〟・〝IMFセット〟[3]などの造語が普及することで、やがては単なる悪い状態を示すものとして民衆に認識された。あるいは〝IMFッテムネ(aiemepŭ ttemune)〟(IMFのせいで)・〝IMF政権粉砕〟などの用例の普及により、韓国全土を不幸に陥れる悪い輩を示すものと考えられ、それらの認識が国際通貨基金に関する政治文化を構築した。

以上のように、現代韓国の政治文化の形成には、ある種の「誤解」が大きな役割を果たしてきた。このことは〈IMF〉ということばが街角から姿を消し始めた現在にも見られる。近年の韓国社会でこの種のキーワードとして、一部でではあるが急速に普及し始めているのが、本稿で取り上げる〈新自由主義〉である。

本稿で「キーワード」と呼ぶものは、ある種の権威を内包したことばを示す。ことばの中には、それがなぜ正しいのかを尋ねることは出来ないが、社会一般で常に正しいものとして盲信されているようなものがある。それらがキーワード(keywords, key words)と呼ばれる[Williams 1983; Bauman 1987]。ただし、類似する概念を扱うその他の研究[ex. Hunt 1984; 中川 1994]を含め、これまでのキーワード研究は、社会において価値が高いと盲信されていることばだけを取り上げてきた。この意味において以上のようなキーワード研究は「美徳のキーワード」の研究だと言える。

本稿が「悪徳のキーワード」と呼ぶものは、現代韓国における〈パルケンイ〉や〈IMF〉のように、ことば自体が社会で否定されるべき性質を包むことばを示す。この概念を手掛かりに、〈新自由主義〉についての「誤解」の発生過程と、それが現代韓国の政治文化において果たしている役割を、描写・解釈・分析する。

1.2 プロローグ

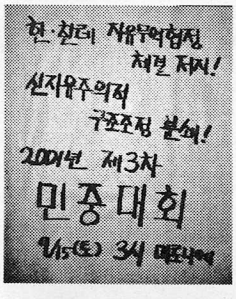
そもそも学術研究における「新自由主義(new liberalism)」とは、一九三〇年代のドイツにおいてW・オイケンが発展させ、二次大戦後の旧西ドイツにおいて「社会的市場経済論」へと発展した経済学用語であった。この時点での「新自由主義」は、経済秩序へ国家が政策的介入を行わない「旧自由主義」を批判するという点で「ケインズ主義」と同様だが、国家による直接的な経済介入を否定する点でそれと違っていた。オイケンは、自由競争が可能となるための経済的社会基盤の創出(「構造的秩序政策」)を行った後、国家が担う経済的役割とは反独占政策と社会福祉政策(「調節的秩序政策」)によって資本主義経済秩序の内破を防ぐことのみに限られるべきだと主張した[キム・ソング 1997]。これが原義としての「新自由主義」の内容であるという。

しかし、八〇年代の経済恐慌の後で経済学の国際舞台に再登場し、その後「ケインズ主義」に台頭するものとして論じられる「新自由主義」は、この原義を逸脱したものだ。大部分の国家では、目下の

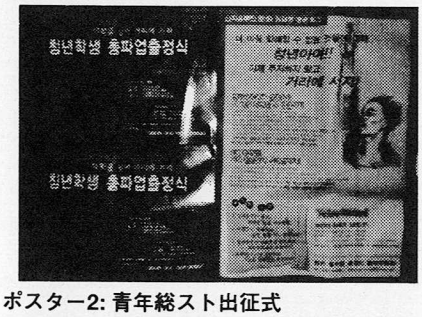
ところ「新自由主義」が「調節的秩序政策」を含まない、つまり「旧自由主義」と同じ野放し状態の自由競争を良しとする立場を意味するようになっている[金世均 1996: 50-51; キム・ソング 1998: 56][4]。この逸脱は同時に、「通貨主義的な緊縮財政の実施、開放化、自由化、民営化のような新自由主義的衝撃療法を実施しろというIMFと世界銀行などの要求」と相まり、「新自由主義」に国際通貨基金や世界銀行を結び付けることにも繋がっている。だが八〇年代以降に語られる「新自由主義」の概念は、現代に出現した経済政策上の新しい立場を常に表すものではない。一部ではオイケンから繋がる一貫した経済学思想史に論拠しているものだと認識されているため、「新自由主義」について議論する場合には論者によってこのことばの内容がまったく異なるという状況が生じ、論者も気付かぬ間に議論が混乱する[金世均 1998: 73]。

韓国の一部の知識人たちも、このような国際的な混乱の中で「新自由主義」を語り始めた。韓国社会には、このことばが学界を超えて広く普及するに至る契機が二つあった。第一に、経済恐慌に直面した韓国が九七年末以降三年間にわたって国際通貨基金による経済管理体制下に入ったことである。既に述べたように〈IMF〉は彼(女)らにとって悪徳であり、その思想である〈新自由主義〉はキャンパスや運動雑誌などでまず批判されるに至った。第二には、[Wallerstein 1995]が話題になったことが挙げられる。資本主義が世界システムの中でイデオロギーとして登場し、歴史的に多くの意味を持ち、多くの機能を果たし、そして終焉していくことを論じる同書は、資本主義と共産主義の対立の犠牲者だという自己意識が強い分断国家の韓国の知識人たちに注目された。そして原書が九五年末に公刊されたばかりにも関わらず、九六年夏には韓国語版[ウォーラーステイン 1996]が出版された。

この本を読んだという大学生にインタビューしたところ、その多くが資本主義以降の不安定な政治経済状況への危機感と「新自由主義」への不信感を掻きたてられたと述べた。ある学生は、「学科の先輩たちとの勉強会で読んだのですが、皆も同感だと言っていました」と言う。韓国の大学では、この種の自主勉強会が学科自治会や運動セクトなどにおいてカリキュラム化され、そこで話されたことが言説化して広まることが多い。「新自由主義」ということばは、まずこうして悪徳のキーワードたる〈新自由主義〉として生まれ変わっていったと考えられる。



ポスター1:
第3次民衆大会
「韓-チリ自由貿易協定対決阻止! 新自由主義的構造調整粉砕!」を主題に。(01年9月 ソウル大社会科学部通路で)



ポスター2: 青年総スト出征式
準備委員会 主催。「新自由主義と民衆たちはこれ以上和解できない」と、「新自由主義政権・金大中政権の退陣」が第一要求。(01年5月 ソウル大人文学部通路で)

現在では、特に在野から社会変革運動に積極関与する人々の間で、〈新自由主義〉が流行語となっている。反面で中道路線を行くマスコミや一部の社会科学者たちは、〈新自由主義〉を語ることに慎重な立場を保っている。上で示した通り、ことばの内容が曖昧で、このことばを使う者には新左翼派の印象まで付きまとうからだ。

だが世界システムに関わる「新自由主義」の問題は、政治経済のみならず、更に大きな領域の議論を呼んでいる。例えば、「一九八〇年代末以降に韓国社会で展開されている「ポスト・モダン」の文化現象は、このような韓国資本の新自由主義的な流れと無関係でないものと見られる」[カン・ネヒ 1998: 115]というように、「文化」を語る際にも用いられる。また、「民主化」以降に民衆運動最大の政治的イシューとなっている労働問題についても、多くのポスターに見られるように、〈新自由主義〉が労働者の更なる疎外を生むという言説が広まっている。そしてこのことばは、アカデミーやキャンパスを飛び出し、労働者の間へと広まり行くのである。

ポスター3: 全国民衆大会
全国民衆連帯 主催。「WTOコメ輸入反対・新自由主義の構造調整阻止・民衆生存権争取・金大中政権反対・反戦平和 米国反対」を訴え、集会への参加を呼びかけるもの。(01年11月 地下鉄新村駅構内で)

1.3 研究の対象と方法

ここで紹介するのは、ソウル市南西部の旧工業地帯に位置するY教会である。この教会は、キリスト教徒が過半数を占めるとされる韓国のキリスト教界において最も大規模な組織を持つ大韓長老会派に属している。ただしY教会は、〝一般教会〟とも呼ばれる保守教会に対し、積極的な社会参与を行おうとする点で〝民衆教会〟と呼ばれる教会の一つだ[59]。

Y教会は、都市の労働者たちに福音を伝道する目的で五〇年代に組織され、過酷な労働環境にある労働者たちに労働組合を組織させるための活動を行ってきた。七〇年代から八〇年代には軍事政府による大規模な弾圧に遭い、社会的にスティグマ化され、その中で宗教的・イデオロギー的な葛藤と転換を繰り返してきた。九三年の「民主化」以降には、労働者とその家族たちから成る信仰共同体の育成、ホームレス問題への対策や、他のアジアの国々に労組支援のノウハウを分かつ活動などを中心的に行っている[60]。現在の構成員は、〝実務者〟と呼ばれるスタッフ9名(聖職者3名・非聖職者6名)と、一般信徒50名程度(大人約7割、男女比約2対5)からなっている[61]。なおY教会には、他の〝民衆教会〟と同様に、長老会派に属しながら〝長老〟の役職を一般信徒に与える制度がない。その代わり、二年以上Y教会に通う素行が優良な成人一般信徒のほぼ半数が、選挙を通じて任期一年の〝執事〟を命じられ、教会の委員会(会計・親交・奉仕など)を分担することとなっている。

著者はこの教会について九八年夏より計二五ヶ月の現地調査を行った。この間には、Y教会の教会史やマスコミでの取り上げられ方などの外観を把握することから調査を始め、時間を掛けて内部に同化することにより構成員たちが持つ諸々の内観を理解しようとする方法をとり、特に最後の十三ヶ月には著者自身がY教会の活動に奉仕者として「参与観察」した。本稿では特に、山間の合宿施設を借りて行われたY教会の夏季修練会（以下、修練会）を紹介する。

修練会は、韓国の教会組織において年にふつう一～三回ほど行われる。Y教会の場合には、宗教的修練、一般信徒教育、親睦と慰安を目的に毎年の夏に一回だけ行われてきた。本年の修練会は、「我々が出会った主」と題され、これまで宗教色を極力押さえて修練会を行ってきたY教会において初めて宗教色を前面に出した試みであった。著者は、写真および映像記録係としてこの修練会に参加し、前後に参加者と非参加者のインタビューを行った。以下、登場人物はすべて仮名とする。

2　破：国際情勢と「○○ちゃんのお父さんの失業」

2.0　セッティング

修練会に参加したのは31名だった。その中から子ども10名とベビー・シッティング担当の信徒1名を除いた20名が、本章の登場人物の母体となる。20名の内わけは、教会スタッフ7名（男性5名・女性2名、うち聖職者4名）と、一般信徒13名（女性7名・男性6名、うち執事7名）だ。一般信徒の出席率が低くなっているのは、夫や子どもたちがY教会に通っていない女性信徒が家事などの理由で参加できなかったことや、金曜の仕事を休めなかった会社員の信徒が多いことを反映してのことだ。子供たちは、ベビー・シッティング担当者を姉のように慕う1名を例外として、親が参加しない限り修練会に参加しなかった。修練会に参加した一般信徒たちには3組の夫婦が含まれており、この他に2名（男女各1名）も配偶者は欠席であるが子ども連れで参加した。非聖職者のスタッフが2名欠席した理由は、入院中のためと、海外出張のためだった。

表1: Y教会2001年夏季修練会日程

	8月3日(金)	8月4日(土)	8月5日(日)
06時		早朝礼拝	(早朝礼拝)
07時		洗顔・朝食	休憩
08時		霊性生活	月例親睦会
09時	集合・出発	セミナー	閉会の礼拝
10時		新自由主義	出発
11時	到着	セミナー	
12時	部屋割り	昼食	
13時	昼食	プール遊び	到着・昼食
14時	開会の礼拝		解散
15時	心理テスト	休憩	
16時		契約文準備1	
17時	夕食	夕食	
18時	讃美歌斉唱	讃美歌斉唱	
19時			
20時		契約文準備2	
21時	告白の時間		
22時		蝋燭の	
23時		火の礼拝	

修練会の具体的内容は、表1に示した日程表の通りだ。チャーター・バスで合宿施設に入り、まずその一室で「開会の礼拝」を行う。

Y教会のあらゆる礼拝は、引導担当牧師である王牧師(37歳男性)によって主導される。この修練会でも、礼拝と名の付く部分は王牧師が主導した。次に、「自分との出会い」という名目で、王牧師が用意した心理テスト(エニアグラム)[8]を各自が行い、その結果に基づいて自己実現のための方針を話し合う。夕食の後には、電子ピアノの伴奏に合わせて讃美歌を斉唱する時間がある。実際のところは、「讃美歌斉唱」の時間のみならず全ての式次第の合間に歌が数曲ずつ歌われ、それらは一般に讃美歌と言われるものだけではない。日曜礼拝にも見られる〝民衆教会〟の讃美歌の特徴は一般的な讃美歌に若干の〝民衆歌謡〟が混ざっている点にあり、この修練会で歌われた歌も八〇年代のフォーク・ソングや学生運動歌が全体の約二割を占めていた。初日の最後には、参加者各自が「主」に出会った瞬間(入信の経緯・奇跡に触れた経験・加護を感じた時)の話をする「告白の時間」があり、王牧師の司会のもとで各自一回ずつそれを告白した。一日目の終わりのインタビューでは、プログラムを準備した聖職者を含む数人の参加者が、宗教的風潮が強い今年の修練会に違和感を感じると語った。

二日目は「早朝礼拝」から始まり、二つのセミナーが行われた。大学院で神学修士の学位を取得して間もない宋伝道師(31歳女性)によって執り行われた「霊性生活セミナー」では、〝霊性〟という概念が神学界で見直されていることが報告され、精神的な信仰生活を再考することが説かれた。この次に、本章で詳細に扱う「新自由主義セミナー」が行われた。昼食後には、子どもたちとのプール遊びが行われ、この修練会の目的の一つだった「共同体契約文の準備のための討論」へと続いた。これは、Y教会が長老会派の中での昇格を果たすのを機会に、自集団を特徴づける意味で集団内の約束事を決めようというものだ。〝一般教会〟／〝民衆教会〟の別を問わず、他にも既にこのような契約文を持つ教会はある。執事の選出規定等の制度上の規約は既に完備されているので、ここでは生活規律が話し合われた。そしてこの日の最後には、参加者各自が暗い部屋で火が灯った蝋燭を持って輪になり、自発的に、しかし必ず各自一回、順に自分の罪を告白して懺悔するという「蝋燭の火の礼拝」が行われた。ここで懺悔が済んだ者は、自分の蝋燭を消して円の中心に進み、そこに置かれた長さ一メートルほどの十字架に釘を打ち、またもとの位置に戻り次の者の懺悔を聞く。二日目の終わりには多数の参加者が、合宿所の前で夜更けまで冗談を言い合い、夜食とビールを分け合っていた。[9][10]

三日目の「早朝礼拝」は、予定にはなかったが有志により急遽とり行われた。聖職者の中にも参加しなかった者がおり、参加者には特徴が見られなかった。最後に「月例親睦会」として聖書の内容に関するクイズ大会を親交委員が催し、「閉会の礼拝」で終わった。

つまりこの修練会は、①過去から現在までの自分を考え直し、②現在の周囲の状況を再把握し、③各自の生活の場としての教会の未来像を設計するという流れを持つものだった。本稿が言及する「新自由主義セミナー」は、この中で②に位置する。なお、「新自由主義とは何ですか」という質問をセミナー前にしておいたところ、1名

の例外を除き全ての一般信徒たちは、ことば自体を聞いたことはあるものの、どういう意味かは分からないというように答えた。

このセミナーをめぐる議論は、セミナー自体が始まる前に既に始まっていた。長老会派の中での昇格に伴い、Y教会は内部の労働運動組織体と宗教組織体を明確に分離することとなった。この分離は、両者が今後も同じ建物内に同居することを前提とし、ただ組織構成・活動の責任・予算を明確に区分しようというだけのことを意味する。よって全ての一般信徒がこの決定に賛成していると言われる。だが、信仰生活と社会参与の調和というY教会の四〇年以上の「伝統」を捨てることに対し、一部の一般信徒はY教会が〝一般教会〟化するのではないかという不安を漏らしてもいた。

「新自由主義セミナー」の直前に開かれた「霊性生活セミナー」の後半では、そのセミナーが信仰生活の重要性を強調しようという意図によるものかという一般信徒の質問が殺到した。宋伝道師は信仰生活の重要性を再考しようとの意図だと説明したが、特に〝執事〟たちは穏やかではなく、遂に申執事(36歳女性)が修練会自体へ違和感を表明した。

「今回の修練会がうちの教会で初めて主を主題にしたものだということは、意味があると思います。(中略)でも・・・、正直言って私はちょっと負担です。」

宋伝道師の返答を待たず、朱執事(36歳男性)は食らいついた。

「宋伝道師様がおっしゃる霊性とは、一般教会で言っているのようなものではないと思うのですが・・・。一般教会の霊性の概念は神秘主義に陥りがちです。(中略)。そういった教会とうちの教会の違いは、うちの教会が人間中心的であることです。(中略)。一般教会の立場との違いを、もしあるなら、明白にして下さい。」

宋伝道師は、「罪悪感を呼ぼうというのではなく」と何度も強調しながら、神学者のことばを引用しながら朱執事の質問に答えた。ここで言う〝霊性生活〟とは、「人間としてのキリスト者」が送る「多様な実践の集合体としての生活」を表すのであり、祈祷ばかりの生活や古典的な禁欲生活を意味しないと語った。間髪いれずそれを砕いて説明した洪牧師は続けた。

「祈るだけが霊性生活ではありません。色々な霊性生活がありえます。(中略)運動だけしている霊性生活を送るのか。いま韓国には、我々が霊性ということばを通じて我々のアイデンティティを探さねばならない、そんな時が来ているでしょう?」

このようにして結局は、宋伝道師らが従来に目指した信仰生活の重要性を再考という目的から外れ、社会参与も信仰の一形態だというY教会の伝統的な考え方を再確認するだけで「霊性生活セミナー」は終った。休憩時間の聖職者たちは、集まって修練会に意図された①~③の流れを再確認し、運動の中で「純粋な信仰」が軽視されているという宋伝道師の話は間違いではないが、今回は荒治療すぎたという認識で合意したという[10]。一般信徒たちも、点々と集まり話していた。喫煙所の前に集まった男性たちは、「宋伝道師もまだまだ若いってことだね」と茶化し、Y教会のアイデンティティは「歴史的に」労組支援にしかないなどの話をしていた。そして午前十時。

「新自由主義セミナー」の時間が来た。

2.1 段階一：知識人の権威とイメージの付与

「新自由主義セミナー」は、予定を変えてY教会の責任者である白牧師(45歳男性)の話から始まった。白牧師は、黒板に「自己発見→霊性→社会・民主実現」と書きながら、この修練会の意図された流れを一般信徒たちに初めて説明した。神妙にただ聞いているばかりの人々の前で、マイクは白牧師から富執事(35歳女性)に渡った。本来このセミナーは、ある名門大学で社会学の博士号を取得し労働問題関係の研究所に勤めている丁執事(40歳男性)によって行われることになっていた。ところが、丁執事が仕事の関係で遅れて来ることとなったため、労働者を対象とした私的な夜学で以前に同様のセミナーを受けたことがある富執事が行った。

修練会のプログラム冊子には、高麗大学教授のものとされる「新自由主義が生んだ具体的な諸影響」というA4サイズ四ページの文章が掲載されていた[11]。富執事はこれを「新自由主義について端的かつ的確に要約している」と評価し、参加者たちに輪読させた。

テキストの序章「一．新自由主義の世界化は絶望の世界化」は、以下のように始まる。

「独占資本家により主導される新自由主義の世界化の結果は、(中略)第三世界の貧困化と希望の喪失、失業の急速な増大と給料の低下、小規模生産者たちの倒産、教育と医療体系の弱化、自立性と自律性の破壊、共同体と生態系の破損、犯罪と移民の増加、それと共に北半球の納税者たちに対する収奪と社会的攻撃(社会保障を後退)、麻薬の増大、温室効果など気象異変の促進、そして一部の世界的既得圏層の贅沢と浪費、資本の過剰による経済の投棄化、金持たちの財産保護のための方法と保安、監視政治の高度化、社会的違和感の拡散などを巻き起こす。」

この次に、「二．アフリカの場合」「三．南米の場合」「四．東アジアの場合」「五．国内の経験」と事例紹介が続き、最後に「六．国際組織の批判的声と抵抗」で終る。

つまりこのセミナーは、「新自由主義」ということばの原義や八〇年代以降の学界における認識には触れずに進んだ。前章で紹介した学説史および定義＝内包的説明からではなく、彼(女)らはその具体的影響、つまりある種の外延的説明からスタートしたと言える。

ここで着目すべきは、この外延的説明の方法である。このテキストでは「新自由主義」が、何の「合理的」説明もなしに、それ自体が既に悪いイメージを持つようなことばに結び付けられ、それらの長い羅列によって説明されている。それらのことばの多数は、参加者たちにとって日常用語ではなく、また何らかの学問領域で既に議論され決定付けられているものだという印象を人々に与える。後日に参加者たちに行ったインタビューで盧氏(33歳男性)は語った。

「正直、俺には間違ってると言えない内容じゃないか。専門家たちがそう言うんだろ？ ならそうなんだろうと思うだけさ。(中略)俺には生態系を語れないよ。厄介すぎる。」

2.2 段階二：概念の再解釈とキーワード化

テキストを読み終わった時点で、申執事が「新自由主義はどこから始まったのですか」と質問した。富執事は、しきりに上を見ながら、しかし「講師の先生」よろしく答えた。

「英国で現れました。あのですね。英国は言っても福祉国家だったんですが、福祉国家として国民たち全体で、こう・・・よい暮らしをしていたんですが、ある日気が付くと・・・福祉病という・・・病気に掛かってしまったんですよ。だからこれじゃ駄目だと、自由・・・自由・・・自由市場に任せなきゃと。(中略)世界化というのはですね。ほらビル・ゲイツみたいな人が、世界のどこにでも、・・・アフリカみたいな国にもコンピュータを売ろうとしたからです。(後略)」

続いて、アジアの途上国にY教会のノウハウを提供することを専任業務としている洪牧師が、アダム・スミスの「神の手」の話を用いてイギリス経済についての長い追加説明を行った。また彼は、「新自由主義」の反対が〈社会主義〉ではないことを強調した。

「新自由主義の反対は、民主主義が主導する経済政策、民主主義の共同体と文化が主導する経済政策、民主主義の経済政策です。」

これにより「新自由主義」は、〈民主主義〉ということばの敵となった。それ自体も民衆にとっては「厄介」なことばである〈民主主義〉は、どのような近代社会においても美徳のキーワードだ[cf. Cole 1998: 111; 太田 2000: 91-92]。

同時に、現代韓国社会において一大スローガンとなっている〈国際化〉が「世界化」と区別された。

「新自由主義の世界化というのは国際化のこととは違います。国際化というのは、例えば「英語の国際化」というように使えるでしょう？ 問題は、新自由主義のような非民主主義的なものまで世界化されてしまう点にあります。」

崔氏(37歳女性)が言った。

「前にニュースで、スイスのジェノバで世界化に反対して示威があって一人が死んだって、言ってましたよね[12]。そういう場合の世界化に反対っていう話も・・・。」

これで〈国際化〉が持つ美徳のキーワード性がこの議論の本筋に影響を及ぼさなくなった。

ここで言及しなければならないのは、洪牧師の仕事場である国際事業部が「活動の国際化」を掲げることで自身を正当化しており[太田 2001]、日常の活動において〈国際化〉のキーワード性を戦略的に利用しているということだ。「新自由主義の世界化」を糾弾するにあたり〈国際化〉ということばに悪い印象が及んだ場合、必然的に彼は自らの活動の正当性を脅かされ、Y教会における存在意義を失うことすら予想できる。彼にとってこの発言は、「新自由主義」を説明するためのみならず、自らの職の安全のためにも必要だった。

ここまでで、既に諸々の悪いイメージを付与され、かつ〈民主主義〉の敵とされた「新自由主義」は、悪徳のキーワードとしての性質を帯び始めていた。

2.3 段階三：悪徳の可視化と「誤解」

前段階から始まった「新自由主義」という概念の再解釈は、とつぜん新たな方向へと向かい始めた。白牧師が黒板に「資本の原理(責任)」と書く一方で、王牧師がここまでの内容を再び整理し、「我々の問題として、可視化して、考え直してみましょう」と付け加えたのだ。富執事が王牧師の発言の意図を明らかにする形で補足した。「国家がそれを保護できない状態になるんですよね。IMFのように。」だからこそ話を生活レベルまで下げようと言うのだ。

少しずつ〈新自由主義〉という悪徳が各個人の日常生活に結び付けられ始めた。まず池氏(34歳男性)が発言した。「そういう傾向のためにIMFが発生したんじゃないですか？東南アジアや東北アジアでは。」洪牧師が横槍を挟んだ。「IMFだけじゃないでしょう。我々はIMFしか知らないけど。(後略)」ここで白牧師が韓国の歴代政権による経済政策を説明した。それを受け朱執事は、「おっしゃることは分かるんですが」と前置きし、「実生活は、(中略)世界的な経済体制から大きな影響を受けないこともあるけど、そういうことをどう考えればよいのか・・・」と首をひねった。白牧師は、「これは新自由主義のせいであり、単なる経済の話だけでは済まされないということです。政治体系を変えてしまうことであり、社会文化を変えてしまうことであり、我々が先天的に持っている韓国文化も影響を受けています。どんな影響を受けているかは、個人によって違うものなんですけどね。(後略)」洪牧師は、この問題が個人の雇用や家族、果てはエイズ問題にまで影響していることを論じ、「だからアジアの国々は連帯してこの問題を解いて掛からねばならない」と自身の活動に話を持ってきた。

吉氏(46歳女性)は、横にいる著者だけに聞こえるように、「そりゃ関係ないでしょ」と囁いた。学習塾の講師である彼女は、ある名門大学で韓国近代政治史について研究した経歴を持つ文学博士である。このセミナーの間ずっとボールペンをいじったり冊子に落書きしたりしており、口を開いたのはこの時が最初で最後だった。

洪牧師の発言により、議論は国際的な問題の把握から彼女らの活動上での問題へと移った。富執事が人々の意見を求めて言った。「でも問題は、資本の速度に比べて民衆たちの抵抗や生存権の確保のための闘争は遅い。それなんです。我々には受動的にするしかないなどという制約が多いのですけど・・・。なぜ?」

蔡執事(36歳女性)が、問題が大きいためそれに関わろうという姿勢を持つのが難しい点と、マスコミがこの問題を扱わないので問題に気付くこと自体も難しい点を挙げた。これを受けて白牧師が国家的水準へと話を戻しつつ発言した。七〇年代の韓国で朴正熙が開発独裁を進めたのも「新自由主義」的状況のためで、「新自由主義」に対する問題意識の難しさだけを認めたら朴正熙の独裁をなかなか粉砕し得なかった当時の民衆と同じだと言った。苦笑いが起こった。朱執事が、七〇年代と今とでは状況が違うと反論し、問題化の困難さと問題意識を共有した人々の活動は直接関係がないと説いた。

若干の静寂。王牧師が実弟の失業問題を語り出した。要約すると、以下の通りだ。彼の弟は病弱で、銀行の電算室での過労により内臓

を弱らせた。医師に手術を勧められたが、銀行は欠勤を認めない。その上、会議をすべて英語で行う社則を作り、夜遅くまで残業する弟に英会話学校へ通うことまで求めた。更に弟は、二年間の契約社員という待遇にリストラされた。更なる過労に苦しんだ弟は、遂に手術することになり、解雇された。

人々は神妙な面持ちになった。特に経済危機以降には、このような話が身のまわりに溢れている。再び静かになったところで、富執事がため息をついて言った。

「私たち、資本なしで生きていける？私もＩＭＦが吹き荒れた時には人事じゃなかったわ。(中略)そんな場合(家計の危機――著者註)にまず私たちが出来る対策は、教会への献金を減らすことよね。」

大きな笑いが起こり、池氏が「駄目でしょ」と叫んだ。富執事が再び日常生活の話から考えようと強調し、池氏が未来を予測しながら話そうと提案した。それを受け、中学校の音楽教師である蔡執事が韓国で予定されている十学年制導入の話を始めた。小学一年生から高校一年生までを十年一貫教育で教える十学年制は、もともと欧米の制度である点、それにより、今まで安全な職業であった教員も解雇の危機にさらされる点、教育内容の質が低下することが懸念される点が報告された。また、しかし現状でさえ教師の不足により担当する授業が多く、研究や雑務の時間が十分に持てなく、教員の負担も教育の質も問題が多いと指摘された。続けて丁博士の妻である徐執事(40歳女性)が、丁博士の労働環境について報告した。丁博士も、前の職場の労働環境に不満を持ち今の研究所に移ったが、二年契約の雇用体系であり、しかも年俸制であるため、無理な激務を引き受けがちだという。

少し間を空け、徐執事が言った。

「労働現場での契約雇用制も、英語の公用化も、十学年制も、年俸制も、みな新自由主義的な世界化の結果です。正直言って、〇〇ちゃんのお父さんの失業だって、そういったことのせいですよね。悲惨な状況です・・・。本当に。」

十二時が過ぎた。富執事が最後のことばを述べた。

「これは実に大きな問題です。対策として我々は労働運動をするのか、どうするのか。・・・それはゆっくり考えていきましょう。」

このセミナーに参加していた一般信徒のうち1人を除く12人に後日行った個別のインタビューによれば、結果としてこのセミナーが彼(女)らに残したものは何かということについて一致する答えが返ってきた。彼(女)らがこのセミナーで得たものは、「新自由主義」の定義でも、その具体的な対策方法でもなく、〈新自由主義〉が非常に危険で間違った考え方でありながら世界に蔓延しようとしているという認識と、それは自分たちの日常生活にまで実害を与えているという意識だったという。

3　急：政治的戦略と日常的実践

3.1　エピローグ

数週間後の日曜礼拝の後で、信徒の何人かが冗談を言い合ってい

るのが聞こえた。強い口調でまくし立てるある人物に対し、洪牧師が反撃していた。「この新自由主義みたいなヤツめ！」その週の平日には教会で使う事務機器を買い換えるための品定めが行われていた。多機能な三星電子製にするか互換性の高いヒューレッド・パッカード社製にするかに意見が分かれた。盧氏が言った。「新自由主義に抵抗して三星にしましょうよ。」また数週間が過ぎた礼拝後の昼食時、炊事当番が作ったラーメンはとても水臭かった。既に食べ始めていた崔氏がこれから食べようとする宋伝道師に言った。「このスープ、新自由主義だわ。キムチを入れた方がいいわよ。」

このようにY教会の中での「新自由主義」の意味の逸脱は、原義が曖昧だという水準に留まらず、悪徳のキーワードの域に及んだ。つまり、思想や経済政策を示すだけではなく、人や品物や飲食物の味などまでをスティグマ化するために使われることばとなった。傾向として、Y教会の人々は〈新自由主義〉ということばを弱者虐待や外国勢力にリンクさせて使うことも感じられるが、これは「新自由主義セミナー」で登場したビル・ゲイツや西欧型制度についての言及が影響しているものと推測できる。

以上のような発話事例を見ると、「新自由主義セミナー」が彼(女)らに人や物を批判する武器を提供したことが分かる。「キリスト教の教義はアレゴリー化という伝統を踏襲してきた」[Douglas 1966: 86]と言われるところに従うなら、同セミナーにおける新たな悪徳の誕生は、Y教会の人々の間で現代社会をアレゴリー化した結果だったとも考えられる。

〈新自由主義〉を悪徳として認識した人々は、経済学的な意味での「新自由主義」に対しても、強く否定する立場を取る。修練会に参加しなかった一般信徒の柳氏(27歳男性)や具氏(36歳女性)は、教会内で人々が使うことばを聞いて「新自由主義は悪いものだ」と認識したという。その結果として例えばテレビの討論番組である経済学者が「新自由主義」の利点について話すのを聞いた時、それを見ていた富執事と柳氏はテレビに向かって罵倒し、一人は部屋を退出し、残りはテレビを消してしまった。これは「新自由主義セミナー」を起点とする彼(女)らの〈新自由主義〉論議が、彼(女)らの政治文化を形成していっていることを表している。なぜなら柳氏の場合で明らかなように、文脈を脱し悪徳として言説化された〈新自由主義〉ということばへの認識・評価・感情が経済政策としての「新自由主義」に対する認識・評価・感情に反映され、その「誤解」をもとに経済政策に対する政治的立場が形成されているからである。

学生たちの勉強会を通じてキャンパスで広がる〈新自由主義〉ということばは、学生たちが持つ知識量を反映してY教会の場合とは少し異なるが、悪徳化されているという側面では共通している。〈新自由主義〉への抵抗を呼びかけて壁に貼られたポスターやステッカーには、ゲイツではなくブッシュが頻繁に登場する。このような掲示物を作る学生たちは、戦略的にせよ無意識的にせよ、〈新自由主義〉という悪徳を象徴する人物としてのブッシュを悪の権化のように認識し、その認識を広めようとしているとの印象を受ける。

ポスター4: 政治家批判
ある学生団体が作ったもの。ブッシュ、金泳三元大統領、李會昌ハンナラ党党首、朝鮮日報による結託と暴挙を揶揄。(01年8月 ソウル大構内で)

ポスター5: 風刺写真
ある学生団体が貼り出した合成写真。ブッシュとアメリカによる「力の外交」を風刺。(01年9月 ソウル大構内で)

このようにして韓国の都市社会に溢れていく〈新自由主義〉ということばは、ほとんどの韓国人にとって、詳しく学習する必要こそないものの、まったく知らないと困ることがあるという。申執事は、他の組織集団でも「新自由主義セミナー」が行われていることを著者に教えてくれながら語った。

「私はもう新自由主義セミナーはいいわ。一度参加したもの。どういう意味か分からなくて気になっていたけど、もう分かったの。(中略)もう近所の小母さんたちと話す時に新自由主義の話が出たって、もう大丈夫。」

人々の暮らしにとって、「新自由主義」の原義や学問上での意味が何であるかは、あまり重要な問題ではない。自分の生活に深く関わりがないことばを使う隣人に出くわした時にも、そのことばが良いものか悪いものかさえ分かれば、十分に話をやり過ごせるからだ。このことばの内容を「合理的」に考えようとせず曖昧に把握するという民衆的認識は、「異種混交性」が高い都市住民[Wirth 1938; Southall 1973]の生活上の必要性を反映したものでもある[13]。

3.2 研究の結論と補足

都市空間の「異種混交性」の問題で多く議論されるものの一つは、階層概念である。多くの人類学的研究において階層概念が有効に活用されているのは事実で、中でも都市における組織集団の研究は階層概念に依存してきた程度と割合が高い。しかしそのような研究の相当数が階層偏重主義の問題を抱えているのも事実であり、都市の組織集団研究は根本的な思考の転換を求められている[Gregory 1998: 7]。

本稿で民衆と知識人を分けて考えたのは、調査の上で両者の差異を感じた著者の経験に拠ってのことである。しかし両者には本質的な差は主張しがたく、せいぜい基本原理や理念形としての差しか見られない。ここに紹介した人々も、実際には「権力の底辺にも頂点でもない、それらの中間にある数知れぬレベル・環境・位置」にいる[Dahl 1991: 21]。しかも序章に経済学の例で紹介したように、学者たちの科学体系ですら民衆的認識に類似した概念使用上の問題を内包して成り立っている。

民衆的認識の背景は、階層や学歴によって言い尽くせない。ここで階層より重要な問題は、組織集団や各個人が情報を認識する際に、どのような環境において、どのような基盤に立って、どのような処

理をするのかである。本稿で示そうとしてきた民衆的認識というものは、情報伝達者の情報量の不足・テキストの内容の画一性・時間的な制約などの点で環境が何かと不備であり、議論の前提となる知識もそれを語る権威もないという点で参加者各自の基盤が不利であり、イメージや用法によって情報を処理し疑うことがない場合に、人々の間で生じる。そしてそのような場合には、一般的に知識人と言われるような人々であっても民衆的認識によって情報を認識することがあるし、逆にそうではない場合には、たとえ底辺階層者であっても民衆的認識とは無関係でありうることが予測される。

Y教会の「新自由主義セミナー」は、単なる議事録として綴ってみると内容が薄く、論理的妥当性に欠ける点も多く、更に場違いな発言すらも多い。しかし少なくともY教会の場合には、大部分の議論は実際のところそのようなものだ。議論というものに内包されたこのような性質は、そもそもあらゆる組織集団に共通のものではないかと著者は考える。議論の流れは、外部の視点で突き放して見た時に「非合理的」だと思える一言にすら、大きく左右されるのである[島村 1999]。だが先行研究[ex. 朴眞ソク 1999; 吉田 1991; 朴英鎬 1984]は、彼(女)らの動態をイデオロギーだ宗教だと「合理的」に理論立てようとするあまり、人々の日常生活としての組織活動と政策立案には着眼することがなかった。そのために構成員たちが経験しているY教会とは別のY教会を創り上げてきた[14]。

Y教会の場合のみならず組織集団に関する学術研究の多くは、国家史や世界史などの大きな枠に研究対象をはめ込むことで、その組織集団の構成員たちが自らとその周辺状況に対して持つ歴史認識とは対照的なまでに異質なものを表象してきた[Gregory 1998: 5]。特に八〇年代以降においては、大きな政治経済のシステムの一部として組織集団を論じようとする風潮が強い[Burmeister 1988: 98]。歴史や政治経済の問題が重要であることはここで改めて強調するまでもなく、本稿もそれを否定しない。ただし歴史偏重主義と政治経済偏重主義が、ここで批判する階級偏重主義と深く関係していることは明白であり、また研究対象となる人々の本来見えにくい「生活や社会自体が内蔵する解釈」[Geertz 1973: 453]を更に見えなくしていることも想像に難くない。

本稿では、先行研究が行わなかったY教会構成員たちの発話レパートリーの意味分析という作業を通して、彼(女)らの活動の前提となる情報の認識が多様なキーワードに左右されている様相を描写した。これらのキーワードは、美徳や悪徳などという表現以外には還元しえない点で各々のことばの固有の意味を失ったものであるが、彼(女)らの一人一人が非日常的な問題を熟考するコストを省き組織集団の中での合意をスムーズに導く上で重要な機能を果たしていると考えられる。

本稿ではまた、既存のキーワード・「誤解」されたことば・ことばのイメージによって、更に新たなキーワード・「誤解」・イメージが創られ行く様相も描写した。その様相の各具体例は、自分たちには語れない、再検討しえない「厄介」な科学的概念を盲目的に受け入れたり、自らの存在意義を確保したり、不安や同情などの感情

に走ったりという個別的な外観を呈している。だが、それらの個別的な外観の多くも、キーワードや「誤解」など、言語の諸問題と深く関係していることが本稿で例示された。

Y教会のように政治的な方向性を持って活動する組織集団と外部団体(政府や企業など)とは、具体的なイシューをめぐって戦っていると同時に、ことばの解釈をめぐっても戦っている[Melucci 1988: 245,249; Southall 1998: 8]。その過程でことばは、次々と新しい内容やイメージを付与され、逸脱し、時には「誤解」を生んでいく。その過程とは、本稿で例示したような集団での議論と、人々の認識との相互作用の過程を示す。組織集団を外部の視点から見た時に内部の議論が「系統だっていない」と思われるのは、それが広く通じる論理に欠けているからとか、「合理的」でないからだけではない。その組織集団に独特の言語により機能している彼(女)らの(そしてその場の)ことばで議論が進むからでもある。また、彼(女)らのそもそもの問題認識方法が観察者のものとは部分的に違っているがあるからでもある。

「新自由主義セミナー」には多くの科学的なことばが盲目的に使用されていた。本稿と同様に一つの会議の議事録を分析したアプソープによれば、政策立案過程にはその内容より議論のスタイルが重要で、問題の綿密な「描写的(descriptive)」説明よりも「科学的合理性」を強調するスタイルによる「処方的(prescriptive)」説明が歓迎されるという[Apthorpe 1997]。科学的な権威が組織集団の意思決定に与える影響は、韓国社会でも、また日常的・長期的にも観察できる[趙文英 2001: 83]。

「科学的合理性」を強調するスタイルは、文化を色々な体系の集合体であると考えれば複雑な問題の存在を暗示している。学界における「科学」というものも一つの文化体系だと言われる[Geertz 2000: xi]が、学界の外にいる人々も科学めいたことばを使うことで「処方的」説明を行うものであり、ここには学界だけの所有物だとは言えない「科学」の一側面が看取できる。「常識」という一つの文化体系[Geertz 1983]に対し、それと似て非なるもう一つの文化体系が想定できるのだろうか。あるいは「常識」の中には科学的な外見を持つ一種のジャンルがあると言うべきだろうか。いずれにせよ、テキストが書き手の書き方だけで完結するのではなく、読み手の読み方によって絶え間なく再生産されるものである[Vincent 1991]以上、学界の「科学」も学界の中で完結することがない。読み手たる一般人たちは、書き手たる学者の意図に反する読み方でテキストの内容を把握し、書き手の科学的な権威を被って第三者に伝達することがある。知識を伝達された人々は、学界の「科学」に更なる逸脱を加えていくこともある。本稿が主題としたことには、「科学」をめぐるこのような問題が根差している。

注

(1) 本稿の執筆にあたり御指導・御助言を頂いた本学の中川敏先生と、ソウル大学校人類学科の方々、特に黄益周先生と梁善雅・朴徑敔・沈柱亨・趙文英・李榮眞 各学兄姉、及び一連の調査研究に御支

援・御協力を頂いた関係機関各位と現地の方々に感謝したい。

(2) 真鍋は、九三年「韓国民主化」の以前に行った調査に基づき、「労働運動やキリスト教にも関心を寄せてはいたものの、それでもなお《アカ》をめぐる不信感を拭い去ることが出来ずにいた」[真鍋1997: 267]というある個人に着眼している。このことは、政治的方向を有する活動が、共産主義とは直接的に通じていない場合でも、〈アカ〉ということばでスティグマ化されていたことを暗示する。

(3) 大手ファーストフード・チェーンが特別に高い割引率で販売したセット・メニュー。

(4) 金やキムは経済学の分野に限った研究動向を経験的・批判的に論じるのみだが、一例として政治哲学にも「新自由主義の理論家」にとっては「ちっぽけな「福祉国家」の社会政策のほんの断片でさえすでに「マルクス主義」の現われなのである」[バリバール1995: 274]との記述が見られ、「新自由主義」をめぐる社会科学界のこの認識上の傾向は広く深い。

(5) "民衆教会"ということばは、この他にも社会参与に積極的な教会およびその他キリスト教組織の中心となっている組織の固有名称でもある。

(6) 詳しくは、[太田2000: 18-70]に記した。

(7) Y教会の一般信徒の数は、公式の統計がなく、また一部で流動が激しいため、正確に知ることが出来ない。ここでは著者の観察とY教会内の一般的見解から推測して記す。

(8) エニアグラムは、二千余年前の中央アジアに由来すると言われる。イスラム神秘主義で使用されていたものをアメリカのキリスト教界と心理学者が二〇世紀初頭から発展させ、修練目的に使用されている。韓国にも十余年前に伝わり、現在では教派を越えた流行となっている[ジョ・ヨンヒョン2001]。

(9) Y教会を含む多くの"民衆教会"では、教会の建物の外での飲酒と喫煙が黙認されている。日曜礼拝や各種行事の後には聖職者を含む人々が酒を酌み交わす姿も見られるし、退勤後に聖職者たちが飲み屋に向かうことさえある。

(10) このことは、後に聖職者たちへ個別にインタビューした結果による。

(11) 原文には執筆者名が記載されているが、引用の出所など不明な点が多いため、ここにはそれを記さない。

(12) ここで崔氏は二〇〇一年七月のG8に関する報道に言及している。正しくは、「イタリアのジェノバ」である。

(13) 韓国の教会を人類学的に論じるものとして先駆的な研究[ex. 秀村1995]は、階層による住み分けが顕著な地域で、しかも信徒がほぼ地域住民という教会を対象としているが、Y教会の信徒たちは自宅から教会までバスや地下鉄で片道何十分もかけて通っており、階層による住み分けの傾向が弱い地域に住む者がほとんどである。そのような教会も多い。

(14) Y教会の人々は、自集団をめぐるこのような社会的言説が形成されていることに対し、大きな反発を見せることが多い。

参考文献

【日本語】

太田心平 2000「韓国の民衆運動 再考：産業宣教に見る葛藤と転換」，大阪大学大学院人間科学研究科 修士学位論文。

―― 2001「ポスト・ミリタリズムのイメージ：韓国産業宣教とそのアジア宣教センター構想について」，『東アジアにおける文化交流』，国立歴史民俗博物館(非売品)：198.

鳥村共則 1999「70年代韓国における流言」，『国立歴史民俗博物館研究報告』

82: 203-213.
中川敏 1994「インドネシア語政治作文入門」, 関本照夫・船曳建夫 編『国民文化が生まれる時』, リブロポート: 239-268.
バリバール, エティエンヌ 1995(1987)「階級闘争から階級なき闘争へ?」, E・バリバール/I・ウォーラーステイン 編『人種・国民・階級』(若森章孝 訳), 大村書店: 273-325.
秀村研二 1995「韓国キリスト教の現在とその理解」,『社会人類学年報』21巻: 79-100.
真鍋祐子 1997『烈士の誕生』, 平河出版.
吉田千代 1991「韓国労働運動史の一駒」,『川田学系雑誌』83巻特別号-1: 104-121.

【英語】

Almond, Gabriel A. 1975 *Political Development*, Little Brown.
Apthorpe, Raymond 1997 "Writing Development Policy and Policy Analysis Plain or Clear", in Chris Shore and Susan Wright (eds.) *Anthropology of Policy*, Routledge: 43-58.
Bauman, Gerd 1987 *National Integration and Local Integrity*, Clarendon Press.
Burmeister, Larry L. 1988 *Research, Realpolitik, and Development in Korea: The State and The Green Revolution*, Westview Press.
Cole, Jennifer 1998 "The Uses of Defeat", in Richard Werbner (ed.) *Memory and the Postcolony*, Zed Books: 105-125.
Dahl, Robert A. 1991 *Modern Political Analysis* (5th ed.), Prentice-Hall.
Douglas, Mary 1966 *Purity and Danger: An Analysis of Concepts of Pollution and Taboo*, Routledge & Kegan Paul.
Geertz, Clifford 1973(1972) "Deep Play: Notes on the Balinese Cockfight", in his *The Interpretation of Cultures*, Basic Books: 412-454.
—— 1983(1975) "Common Sense as a Cultural System", in his *Local Knowledge*, Basic Books: 73-93.
—— 2000 *Available Lights*, Princeton Univ. Press.
Gregory, Steve 1998 *Black Corona: Race and the Politics of Place in Urban Community*, Princeton University Press.
Hunt, Lynn 1984 *Politics, Culture, and Class in the French Revolution*, University of California Press.
Melucci, Alberto 1988 "Social Movements and the Democratization of Everyday Life", in John Keane (ed.) *Civil Society and the State*, Verso: 245-260.
Southall, Aidan 1973 *Urban Anthropology: Cross Cultural Studies of Urbanization*, Oxford University Press.
—— 1998 *The City in Time and Space*, Cambridge University Press.
Tannen, Deborah 1986 *That's not What I Meant!*, Morrow.
Vincent, Joan 1991 "Engaging Historicism", in Richard G. Fox (ed.) *Recapturing Anthropology*, School of American Research Press: 45-58.
Wallerstein, Immanuel 1995 *After Liberalism*, New Press.
Williams, Raymond 1983 *Keywords: A Vocabulary of Culture and Society*, Fontana.
Wirth, Louis 1938 "Urbanism as a Way of Life", *American Journal of Sociology* XLIV: 1-24.

【韓国語】

カン・ネヒ(Kang, Nae Hŭi) 1998〈新自由主義と文化〉, 民主と進歩のための知識人連帯 編《資本の世界化と新自由主義》, 文化社会社: 114-145.
キム・ソング(Kim, Sŏng Gu) 1997〈新自由主義の経済思想についての批判的研究: W・オイケンを中心に〉,《韓神論文集》14: 557-591.

—— 1998〈資本の世界化と新自由主義的攻勢〉，民主と進歩のための知識人連帯 編 上掲書: 13-60.
金世均(Kim, Se Gyun) 1996〈新自由主義の政治理論の研究傾向と問題点〉，《理論》第15号: 38-87.
—— 1998〈新自由主義と政治構造の変化〉，民主と進歩のための知識人連帯 編 上掲書: 61-77.
朴英鎬(Park, Yŏng Ho) 1984《産業宣教批判》，基督教文書宣教会.
朴眞ソク(Park, Jin Sŏk) 1999〈労働者教育プログラムに表れた社会行動の属性とその変化: Y産業宣教会の事例を中心に〉，崇實大学校統一政策大学院社会福祉政策学科 修士学位論文.
ウォーラースティン，イマニュエル 1996《自由主義以後》(カン・ムング訳)，当代.
趙文英(Jo, Mun Yŏng) 2001〈「貧困の文化」づくり: 貧民地域における「貧困」と「福祉」の関係についての研究〉，ソウル大学校大学院人類学科 修士学位論文.
ジョ・ヨンヒョン(Jo, Yŏn Hyŏn) 2001〈心理プログラム「エニアグラム」で自己探し〉，《ハンギョレ新聞》二〇〇一年十二月十三日: 21.

<Shinjayujuŭi>: Making a Vice in a Church and its Effects in Korea

OTA Shimpei

This paper argues the aspects of which the contemporary political culture is constructed in Korean society by illustrating the process of deviation of an economic term, 'new liberalism' in a church.

Keywords studies have intensively referred to the words that are blindly appreciated, but rarely to the opposites that are strongly denied in societies. The outbreak process of this negative kind of keywords, as this paper shows, consists of three kinds of denial; one is to give some negative images to it, another is to uncover the positive keywords opposite to it, and the other is to blame the concrete everyday hardships on it. They use such keywords to express their recognition, evaluation, and affection of the objects that the words don't mean lexically.

In case they might not use a keyword by its lexical meaning, those that don't know the lexical meaning nor the outbreak process of the rhetorical usages hear to grasp the meaning vaguely, and make a confusion that the grasp reflects the object of lexical meaning at their recognition, evaluation, and affection. In contemporary Korea, the word 'new liberalism' often brings such confusion, and it constructs the political culture about the various issues on both of international and domestic affairs.

Key Words

Korea, political culture, keywords, organization, grass-roots recognition